

I 研究の構想

1 研究主題

自ら進んで学び続ける児童の育成

～ 人との関わりから学ぶ活動を通して ～

2 主題設定の理由

本校は、山里風景が残る自然環境に恵まれた長久手市東側に位置し、令和2年度には、開校40周年を迎える。近年は都市開発が進み、校区にも大型商業施設や新興住宅地が建設されるなど、校区を取り巻く環境が大きく変わりつつある。児童数も増加傾向にあり、その多くが新興住宅地に越してきた新しい住民である。

本校の児童は大変子どもらしく、地域のゲストティーチャーなど、自分たちと関わった人たちと積極的にふれあい、受け入れる姿勢が見られる。また、教師が提示した課題には素直に取り組むことができる。しかし、自分から進んで課題を見付けたり、課題解決に向けて試行錯誤しながら熱心に取り組んだりすることは苦手である。また、校内や授業でできることが校外や生活の場で実践できず、本当の力として身に付いていない。

令和元年度、本校は青少年赤十字加盟校となってから10年を迎えた。また、平成26年度にはユネスコスクールに加盟し、ESD教育にも力を入れてきた。これまで、小規模校であることを生かして地域とのつながりを大切に活動を進めてきた。その活動の様子は、毎年年度末にまとめ、タペストリーとして来賓玄関やユネスコルームに掲示している。中規模校になりつつある現在、地域の行事などに関わる機会が減ると同時に、地域のよさに気づく機会も減ってしまった。そこで、「人との関わり」の中で児童に生きる力を育みたいと考え、授業改善を目指し、本研究に取り組んだ。

本研究初年度は、「人との関わり」に焦点を当て、単なるふれあいではなく、その人から学ぶことや自分と立場や考えが違う人と関わることで、自分なりの考えをもち、自分から課題を見付けることを目指した。そこで、地域をはじめ、近隣の大学、商業施設などに協力を仰ぎ、子どもたちが地域と関わる場を積極的に取り入れた。

本研究2年目は、授業以外でも学校内での「気づき」に目を向け、自分たちの生活をよりよくしたいという思いから「JRCリーダー」を発足した。自ら進んで人の役に立つ活動やボランティア・サービス精神に意欲をもつ児童を募り、学校生活の中から課題を見付け、解決するために学年を超えて協力し、実行する場を設けた。このように、児童同士、地域など、さまざまな「人との関わり」を通して、自分の身近なことで何ができるかを考え、他者に伝達し、他者と協力しながら、実際に行動に移すことができる児童の育成を目指した。

3 めざす児童像

「自他を大切にし、自分で考えて行動に移す児童」

- 自他を大切にする → 自分のことを振り返り、相手のことを思いやる。自己肯定感を高め、自他ともに認めていく。
- 自分で考える → 身の回りの事象や身に付けた知識を結び付けて考える。そして、それに対する自分の考えをしっかりともつ。
- 行動に移す → 獲得した知識や技術を実生活の場面で生かすことができる。あるいは、生かそうとする意欲をもつ。

4 研究の仮説

特別な教科道徳や各教科、特別活動などにおいて、人との関わりから学ぶ活動を積極的に取り入れれば、新しい発見（気づき）につながり、自ら課題設定をし、課題解決の達成感や充実感を味わうことができ、次の学びへの意欲や自信につながり、自ら進んで学び続ける児童が育成できるであろう。

5 研究構想図



6 研究の手だて

- (1) 「気づく」「考える」「実行する」「振り返る」の場面を下のように定義し、授業において意図的にいずれかの場面を設定する。

気づく	… 自分たちで課題を見つけ、その解決に向けて計画を立てる場面
考える	… 課題解決の方法を考え、活動計画を立てる場面
実行する	… 課題解決のための活動に取り組む場面
振り返る	… 活動を振り返り、成果と課題をまとめ、今後の活動に生かす場面

- (2) ペアやグループなどの学習形態を工夫し、自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いたりしながら協力することで、自己理解・他者理解を深め、自己肯定感を醸成していく。
- (3) 異年齢集団や保護者、地域の方などに関わる場を設定し、自分とは違う立場や考えの人もいることを理解し、相手を思いやる気持ちを育成する。
- (4) 活動後に振り返りの時間を設け、自他のよさを認め合うことで、新たな自分のよさを知り、自信をもって自ら進んで学び続けるようにしていく。